

下伊那にたどる「漂泊の俳人・井上井月」

井上井月顕彰会理事 唐木孝治氏

1 はじめに

みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました^{からきたかほる}唐木孝治と申します。今は新型コロナウイルスという事で、まだまだ油断のできない状況が続いていますけれども、今日はみなさんの故郷、ここ伊那谷、四季の変化が豊富な、こういう自然環境の中、先人たちの風流人のみなさんが残してくれた風雅な世界に触れてもらおうと、この時間をここで、私とお付き合いいただきまして、この高森町の市田・山吹に足跡を残した、漂泊の俳人・井上井月。そこを起点として下伊那各地区の方へ彼の足跡を辿って私が歩いた、そんな経験をお話させていただければと思います。よろしくお願いたします。

2 井上井月って誰？

井上井月、今日初めて耳にする方もいらっしゃるでしょうし、今までに結構、勉強なさっていた方もいらっしゃると思います。この写真は^{はしづめぎよくきい}橋爪玉斎って言いまして、上伊那の絵描きの先生で高遠藩直属の絵描きだった方なんですけれども、彼が井月に会った時の印象を絵にしたものです。

羽織袴、来たばかりの時はしっかりした格好をしていたのですが、彼が伊那谷をタイトルの「漂泊」、さすらいの旅を、この谷を選んで30年、私も高森に来て30年なのですが、井月もちょうど30年、この谷を歩いたわけです。なぜここにいたのかなという疑問も生まれ、また、なぜここに来たのかなという疑問もあります。

そういった中で、井月は、俳句は残したけれども自分の身の上とかはほとんどしゃべらない。ですからそういう資料が何も残ってないですね。そんな中で俳句等からこの人の人間像を今までの研究者たちが作り上げてきたわけです。そんなところの一端に触れながら、下伊那での井月というところをお話できればと思います。

実は井月っていうのは、今はほぼ定説になりつつありますけれども、越後、新潟県長岡の出身で本名を^{いのうえかつぎょう}井上勝蔵と申します。今、写真にあるのは長岡城、今から20年近く前の長岡城で、今はこの桜の木ももっと太く立派になっているわけなんですけれども。私が訪れた冬に撮影した長岡のお城なんです。お城の近くに資料館もあり、この近くには崇徳館という、まあ高遠で言えば進徳館、要するに武士のみなさんの勉強する塾があったわけです。吉田松陰の塾なんかも有名ですけども、そういうのは他の藩にもありました。

そして長岡も今言った吉田松陰とか佐久間象山、そういった人たちの門下、弟子たちが塾を開いているわけなんですけれども、井上井月もその塾の一員であったというふうに考えられております。そしてその

人が俳句に目覚めて、俳句を作りながら、分かっている範囲では茨城の水戸とか、西は須磨あたりまで行ったと言われてます。越後を出てですね、なんで漂泊をしなくてはいかんか、ということですけども、簡単に言えば、あてのない旅ですね。

漂泊っていうのはみなさん、ご存じですよ、さすらい。まあ大体、レジュメに沿って申しますと、(簡単なレジュメで恐縮なんですけれども) 一所不在、一宿一飯、定住、決まった住処を持たない、一宿一飯というのは井月にはあまり当てはまらないかもしれませんが、一晩泊めてもらって一回食事をいただく、そして次へ放浪していく、さすらって行くという、簡単に「漂泊」っていう意味合いを語るに簡単な熟語を使わせていただきました。一宿一飯の御礼に井月は俳句を作って、短冊等にしたりしてそれを置いて行ったわけですね。俳句と漂泊、さすらいということのを両立させて生きてた俳人なんです。

俳句という世界というのは専門にやっておられる方が多いと思うので、私が上っ面だけ喋るのもお恥ずかしい話なんですけど、当時、幕末、明治、江戸期までずっとそうだったんですけども、今でいう連句でした。俳句という独立した文芸が成立するのが明治 30 年くらい、正岡子規、名前を聞いたことはあると思うんですけども、正岡子規によって俳句という言葉が生まれて、独立した文芸として発展していくわけです。

それまでは発句って言ってました。出発の発に句ですね。みなさん、お集まりになって、私が一句を詠みますね。そうするとその句に関連したり、まったく正反対であったり、そういう発想の転換をしながらみなさんがだんだんに句を詠んでいくという、まあ、今でも連句をやっているグループも飯田あたりにあるようですが、一つのコミュニケーションの場としての連句の世界だったわけですね。

正岡子規が、単独に発句とか言わないで、俳句そのものの文芸価値を持たせようっていうことで、俳句というジャンルを確立していくわけです。要は天保の時代に小林一茶、ご存じですね、北信の小林一茶から井月までは百年の間があるんです。その間に俳諧っていうのはもちろんあって、その一番の先生は宗匠と呼ばれていたんですね。その宗匠の俳句は月並み、今はあまりいい印象を持ちませんね、月並みっていうのは当たり前みたいな。この月並みっていうのは俳句改革への思い「俳諧大要」の文章の中、「天保以後の句は、おおむね卑俗陳腐にして見るに堪えず。称して月並み調という。」低レベルの句の総称として創作された言葉で用いたのが、正岡子規なんです。

それで小林一茶以後、幕末明治にはいい俳人は、俳句を作る優秀な人はおらない、金儲け主義の指導者ばかりで、いい俳句はないんだという。正岡子規は新聞記者をやっている、自分の新聞にそんなふうにしたんで、それが今、俳句の世界、歴史の中では定説っていうかそれが基本になってしまっているんで、百科事典を見ても百年の空白があるんですね。ですからそういった中に、井月もその時代に入っている俳人ということで、あまり研究対象にされなかったというのが現状、長い間そういう風潮があったわけですね。正岡子規という偉大な人があって、研究のある意味、妨げという言い過ぎですけども、研究をしてもしょうがないかという風潮があったという。そんな中で井月も埋もれていたわけですね。

伊那谷にさすらい、こういうさすらい人を伊那谷の人が受け入れて 30 年も伊那谷を放浪できるわけなんですけども、その時に井月が俳句以外にもそれなりの教養を身につけていて、伊那谷の風流人たちにそういう教養を伝えながら、伊那谷の人々もそれを受け入れていったという結果があるわけですね。

教養を身につける、その中で井月が伊那谷の外にいたということからいくと、みなさんご存知の長岡の米百俵の話は、前の小泉首相が例えて語ったことによって改めて見直されましたね。この米百俵って

いうのは小林虎三郎っていう長岡の崇徳館の、明治3年くらいですかね。米百俵の価値観についてね、「百俵あれば何年も食いつないでいけるぞ」ってみなが思ったら、虎三郎はその米をお金に換えて、「これから将来、みんなの役に立つ学校を作って、みんな教養を身につけよう」という話で、米百俵をお金に換えて、学校、教育の場を作っていったというそういう話です。そういうひとつの知識・教養を重んじて、一時期の教育者としての生き様をした人がいる、そういう崇徳館の人のなかに井月もいたんじゃないかと言われるわけです。

長岡というのはそういう偉人の方、一番最近では山本五十六ですね、海軍の。戦争を始めても3年もつけけれどもそれ以上は無理だと、戦争に反対した人ですね。ところが結局、戦争が始まってしまって非常に悲惨なことになってしまったわけです。いろいろな教養を身につけ、後からちょっと付けさせてもらいますけれども、長岡というのは幕末、幕府方ですね、戊辰戦争の中心になった幕府方の長岡藩、奥羽越藩同盟ですね。そういった内戦で有名なのは、河合継之助ですね。そういった人たちが長岡から出たということなんですけれども。まあ、そういう長岡の出身であると。そういうことでほぼ定説になってきたという、井月の素性ですね。井月はどこで生まれて、どこで教養を身につける素地を養ったのかということで、長岡出身なのだとということです。

3 なぜ井月は現代の世に出たのか？

では、なぜ井月は今、「時の駅」で語り合える、そういう名前が知られてきたのかということです。なんで「井上井月・漂泊の俳人」っていう、「時の駅」の講座でもとりあげていただけるような存在なのかっていう話です。

実は井月って言うと、私も下伊那を歩かせてもらって、時に「ああ、あれは上伊那の人ずら」っていう一言で片づけられることがたびたびありましたけれども、確かに上伊那では有名な俳人なんですけれども、有名っていう意味では、実はこの井月を有名にする元の方が、現在の駒ヶ根市の中沢という所の生まれの^{しもしまいおし}下島 勲 という人なんです。この人も俳句を書く人で、俳号を^{くうこく}空谷、空に谷と書いて空谷と言います。下島空谷というのは、井月をお話する中でも通常に使われております。レジュメにもありますけれども、下島空谷を勲（いさお）って書いてあります。一字で勲、そして勲（いさおし）ともいう。普通、みんな、勲、勲って言っているんですけれども、勲（いさおし）っていうのが正しい名前の方です。空谷で話を進めますけれども。

井月がこちらに来て、上伊那を放浪します。その中で空谷のお父さん、下島筆次郎さんなんですけれども、筆次郎も教養に対しての好奇心が旺盛な人で、俳句も作ったりします。井月を迎える、そういう素地のあった方で、井月を大事にしておりました。

井月が家に来ると「井月さん、よういらっしゃった。寄ってきな、寄ってきな。まあ一杯飲んできなよ」と言って歓待したということですね。

この空谷が5歳の時に井月は、

袴着や酒になる間の座の締り

という句を詠んでおります。これは、5歳になると、今でいう七五三ですね、碁石を打つ碁盤の上に乗っかって、そこで袴を着せてもらう。そして袴を着たら、碁盤の台から飛び降りるお祝いの習わしがあったという。それを明治初期に、空谷が5歳の時にやったという、その時の俳句が今言った「袴着や酒

になる間の座の締り」ということで、お祝いの祝膳が出るまで、ちょっとしたお祝いの緊張感があるね、というそういう俳句を残しています。

ですから空谷の家にしょっちゅう、井月は来ていた、で、だんだん井月も歳を重ねてきますね、30年もいると。それでもまあ、歓待してくれる家を歩くわけです。そうするとだんだん歳もとってきて、教養自体も古くなるわけです。今みたいにインターネットとかテレビとかラジオがあるわけではないですから、情報は入ってこないですね。井月にもね。そうすると井月が身につけた教養はほとんど出尽くすわけですよね。そして、だんだん受け入れてくれる人たちには飽きられてくる。

それでお風呂に入れてくれる家も少なくなってきましたから、虱井月とか乞食井月と、そう呼ばれるようになるわけです。そうやってきた時に空谷、そうは言ってもまだ、5歳から7、8歳の間だと思んですが、悪餓鬼の集団が「やい、乞食井月、乞食井月」ってからかうわけです。ある時、別に当てるつもりはなかったんでしょうけれども、石を投げたと。それがたまたま井月の頭に当たってしまう。そして頭から血が流れるのを子供心に見て、ものすごいショックを受けたわけですね。

ふつうだったら、「いてえな。馬鹿野郎、この野郎」みたいな話になるんでしょうけれども、井月は何も言わずに、頭の傷を触ったと思うんですが、「血が出たなあ」くらいでそのまま歩き去って行った。これは怒られれば子供心に、「やあ、怒られちまった」くらいで済んだかも知れないんですけども、何も言わずに去って行ったその後ろ姿が、ずうーっと心に残るわけですよね。

そして空谷は、お父さんが非常に教養のある人でしたから、いろいろな夢を持ったわけですね、志を。長男だったんですけども、当時の長男は跡継ぎ、何が何でも家の跡を継ぐ存在だったわけですけども、空谷は「俺は医者になるんだ」と言って、中沢を飛び出して、東京の、今の慈恵大学医学部ってありますね、そこの前身に入って医者になるんです。そして無事、医者になって日清・日露戦争に軍医として従軍して帰ってきてから、東京の田端、山手線に田端駅ってありますよね、田端駅に近い所に開業するわけです。

今、この写真に写っている所は、駒ヶ根市の中沢の、左手前にあるのが下島空谷のお墓のある、下島家一統の墓地になるわけですけども。まあ、遠く南駒、これは9月の中央アルプスの写真ですけども、中央アルプスから下伊那の境の烏帽子まで、見晴らしのいい場所にお墓があります。こういう風光明媚な場所に空谷のお墓があるということを見ていただいて。

そして次の写真、田端文士村記念館って書いてあります。これが東京の山手線の田端駅北口を出て左手に進んだ交差点の右奥にこの田端文士村記念館っていうのがあるんですけども、この田端文士村記念館を通り過ぎて、坂を上りきったところから、この田端文士村って言われている、戦前の話ですけどね。ここに有名な芥川龍之介とか室生犀星とかそういう文士が小説を書いたり、あるいは工芸、陶芸をやったりする、そういう文化人がたまたま集まった、そういう場所があったんですね。それで下島空谷という人は、日清・日露戦争から帰って来てから、その田端村に、まあ文士村、行政の村ではないですが文士村と呼ばれるので文士村と言わせてもらいますが、そこに楽天堂という医院を開業するんですね。そして芥川龍之介のお父さんからの主治医となるわけです。

今でも、主治医を持ちましょうみたいな話もありますけれども、自分の身体を専門に見て貰えるお医者さんがいるってことは非常に安心するものですから、芥川龍之介のお父さんも下島空谷を主治医として頼りにした。そしてまあ、出入りをするわけですから、自然に芥川龍之介とも親しくなっていくわけですね。そして芥川龍之介も、文壇ではかなり有名な小説家になっています。そうやって芥川龍之介と

そういう文化的な話をする機会もふえるわけです。

そんな中で、「実は自分が子供の頃、信州伊那谷で乞食井月といわれるこういう人がおったんだよ、そして実は僕は未だ心につかえていることがあるんです。子供の頃、遊びで石を投げたら頭に当たって、その状況を、今だに忘れることができないんです。」

そういう話を龍之介にするわけですね。そうしたら龍之介は、「そこまで思うんだったら俳句を作っていた人なんだろう、ましてやあなたの実家ではその人が実際に書いた俳句が残っているんだから、そういう俳句を集めて井月の句集を出してあげたらいいじゃないか」と、そういう話がまとまっていくわけです。そして空谷は「そうだそうしよう」ということで中沢の実家に行って、「井月句集」というのを発刊するまでにするわけですね。ところがその中には井月の発句ではない句も何句か入っていたわけですね。そういうこともあったんですね。そこで故郷の井月像をもっとしっかり調査しないと、こんな中途半端ではまずいなと空谷は思うんですね。空谷はそう思うし、句集に蹴文まで龍之介が書いてくれているわけです。そしていろいろな折に龍之介と空谷は話をして、龍之介は、上・中・下とある「庭」という短編小説を書いているんですけども、上の冒頭に、江戸時代に庄屋で本陣までやった大きな家が、次第に、後継者とか病気によって、だんだん衰退していく様子を書いてあるわけです。そのこの当主が病に倒れ、床に臥せていて、もう寿命が終わるって分かる時になって、「井月は、まだこんか」っていうセリフを残すわけですね。まあそういう、これは小説ですからフィクションではあるんですが、アイデアを井月の話題の中からもらって、小説にもしてあるんですね。

そこには「山はまだ花の香もありほととぎす」という井月の実際の句も引用しています。

そういうわけで龍之介は井月の存在を知るわけですけども、そういった田端文士村での交流が高浜虚子などと、だんだん拡がって行くわけですね。

さきほどの墓地の所にですね、空谷の愛娘が亡くなってしまうんですけど、病気でね。その時に文士村の、龍之介を筆頭にして久保田万太郎、室生犀星など三人の方から追悼の詩を貰うわけです。この追悼の詩が、風呂敷位の大きさの布に書かれているんですね。それが先ほど写真に出した田端文士村の記念館の中に展示してあります。

これもひとつの空谷との交流の証ということで紹介させていただきました。

そして空谷と龍之介の交流が深まっていくわけですけども、その中で何とか、井月の句集にとどまらず、もっと深いものを出版したいなという希望がつのってきまして、実家の弟さんとか、あるいは今の伊那市に弥生ヶ丘高校っていう高校がありますが、そこで国語の先生をしていた高津才次郎先生にお願いして、ぜひ井月の俳句を探して欲しいと頼むわけですね。そしてこういう人たちが協力して、井月全集出版にたどり着くわけです。

ちょっと戻って、田端文士村についての小説を書いた、近藤富枝さんという作家の方がいらっしゃるんですけど、4年ほど前にお亡くなりになりましたが、私が伊那谷に帰ってきてから『人形芝居の里信州伊那谷』という写真集を発刊して、その写真集を非常に評価していただいて、それから懇意にさせていただいたというご縁のある小説家の方なんですけれども、この方が『田端文士村』という本を出して、現在は文庫本としても出ています。

その第3章に「羅生門の作者」。芥川龍之介のことですね、そして第8章に「王さまの憂鬱」というタイトルで下島空谷について書いたものがありますので、ご興味のある方は『田端文士村』というのを読んでいただくと、戦前にはこういうところがあったんだという、今日お話をさせていただいている井月

と文士村の役割みたいな、下島空谷を通しての関連がよく見えてくると思います。

そしていよいよ昭和5年に、高津才次郎が協力してくれた『井月全集』初版が出版されます。

これが結構出回るんですね。

そしてここで、山頭火というのはみなさんご存じだと思うんですけども、自由律の俳句を作った人ですね、この山頭火が、義理のお兄さんからその全集を「こんなものがあるから読んでみな」って見させてもらって、山頭火は「この本はもっと早く出会うべきだった」って日記に書くくらい、その本の、つまり井月の生き様ですね、俳句云々とかではなくて生き様に感激するわけです。

そして山頭火は井月の墓参りをなんとか実現したいと、そういうふうに思うわけです。そしていよいよ実行に移して、昭和9年に墓参りに、山口県から伊那谷をめざして旅をしてやってくるわけです。ところが昭和の時代になっても、俳句というのは結社的なものがあり、その流派の人たちのところを訪ね歩くわけですね。そういうことで自由律の俳人のところへ寄ります。そこで、折角そこまで行くのなら藤村の馬籠へ寄ってみたらどうだって言って、馬籠へ行くのにそこの自由律の愛好者（同人）は中津川の落合で降りろって言ったらしいですね。中央西線に落合って駅があります。木曾の入口にね。ところが落合で降りると馬籠には行けないですね。それで山頭火は落合で降りちゃったものだから、馬籠にはどう行ったらよいか分からないし、現実、馬籠にはたどりつけなかったです。山道を迷い迷って清内路の峠をやっと越えるという状況になる。迷ってますから日記にはどこを歩いているか書けない。山頭火の日記は非常によく書かれています、どこを歩いてどうしたんだということが、この日々の日記は、書かれていないので、わかりません。ですから現状でも、大平峠を越えたのではないかという人と、清内路峠を越えたっている人と二通りあったわけですけども、今は、大筋、上清内路の旅館の長田屋さんに泊ってますから、そこへ出るには清内路峠しかないじゃないかという話が、郷土史をやっている方はご存じの桜井伴さんが清内路におられまして、やはり山頭火の好きな方で、そういう人たちの研究などもあって清内路が有力説ですが、ここでは大平も候補に入れておきましょう。峠を越えたときに、

山深く露の臺なら咲いている

という句と、

飲みたい水が音を立てていた

っていうのと、

山静かなれば傘を脱ぐ

っていう句をつくっています。

この「山静かなれば傘を脱ぐ」っていうのが飯田の丸山公民館、今宮球場の所ですね、あそこに句碑がありますので、興味のある方は行かれるとよいと思います。

この山頭火が「もっと早く出会うとよかった」と言ったのは田端文士村の流れで、高浜虚子が最初の序文のところに井月讃ですから井月を讃える句として

丈高きおとこなりけん木枯に

という句を作っておりますから評価も高い。山頭火がお参りをしようと目指したのは、この写真の、伊那市笠原末広にあるお墓なんですけれども、これはほぼ山頭火がお参りした頃、鬱蒼とした茂みの中にお墓がありました。

これが数年前に周りの藪がみな刈り取られまして、きれいにすぽんとお墓だけ丸ごと出ている感じになりまして「以前お訪ねした時と印象が違うじゃないか」っていうのを受けてここには、今と昔の写真

を披露させていただきました。

そういうことで、昭和9年の時には迷ってしまって、句だけ詠んで飯田にたどり着くんですけど、飯田では自由律の信奉者で太田蛙堂おおたあどろうと言う人がおりまして、山頭火はそこへ寄るわけですけども、その時に句会をやって、その日の夜に熱を出してしまうわけです。そして当時、川島病院っていうのが飯田にありまして、ちょうど弥生という旅館の前の辺りなんですけれども、その川島病院に入院するんです。肺炎になってます。これはもう入院しなきゃだめだと言って入院をして、回復して、その時は墓参りをあきらめて山口へ帰るんですね。そして改めて昭和14年に、今度は飯田線が開通していますから、飯田線に乗って、当時の伊那町ですね、今の伊那市伊那駅に直接、電車に来て、墓参りを実現するわけです。墓参りに来て「お墓親しくお酒を注ぐ」、「お墓撫でさすりつつはるばる参りました」というような句を四つ作るんですね。ここでお墓参りを実現するという日記を山頭火はしっかり残しています。そういう意味でも全国的に井月が有名になる一因を山頭火が作ってくれたという、そういうことにもなります。

ですから今、出て来たのでは、下島空谷と芥川龍之介、そして山頭火、それに付随してくる高津才次郎、近藤富枝さん、井月を取り上げて世に出してくれたとそういう文化人の方が昭和5年以降に表れて、井月というのが有名になってきたというわけですね。

最近、1980年代になると、漫画ブームがありますよね。今はアニメーションが日本の代表的な文化にもなっていますけれども、つげ義春という漫画家がいらっしゃいます。彼が「無能の人」というタイトルで代表されるシリーズものを『COMIC ばく』という漫画誌に掲載しております。その中に「蒸発」というタイトルの漫画があります。(1986年)

これはつげ義春さんの漫画です。「蒸発」というのは、突然、お父さんあるいはお母さんがなくなっちゃうんですね。その原因はいろいろなんですけれども、蒸発ということに対して、そのテーマでなにかを掘り下げて漫画を描こうと思ったということなんですけれども、そこで「井月全集」っていうのを手にして、ここからひとつヒントを得ようと思って書き始めたら、それがあある意味、空谷の事実、思い出、実際にあったことが書いてある全集を漫画にしていくと、みんな創作というよりもその紹介的な漫画になってしまって、蒸発というのがどこかへ行ってしまったと、そういうことを事実、資料に「創作を加える余地はなく、資料負けでした」と後書きに書いてあるんですね。ですからよほど井月全集には、いろんな逸話とか載っていますが、そうしたものに非常に感銘してしまって、そこから創作をしていく余地がないんだということを言っているわけですね。そしてこの中にもですね、

石菖やいつの世よりの石の肌

という井月の句を引用しておるわけです。こうやっていろいろな人たちによって井月が、昭和・平成の時代に有名になってくるわけです。井月という「漂泊の俳人」が上伊那を含め伊那谷にいたというのがだんだん一般の方たちにも分かってきまして、こうやって劇画にもなり、先ほどの絵の写真は羽織袴でちゃんとした身なりに描いてありますが、この写真は井月が晩年になっての、空谷が石を投げて頭に当たったところを漫画に表したページなのですが、こういう形で漫画が世に出てくるわけですね。

4 人生の転機・幕末

さて、井月が伊那谷を歩いた時代背景というのは、幕末から明治ということで、これはレジュメの中

に年号とか入るので、間違ってもいけないと思って書いておきました。「1853年 ペリー艦隊、浦賀に来航」というところから書かしていただいていますけれど、こういう時代背景の中で、

灰に書く西洋文字や楯あかり

という俳句を井月が作っております。

「西洋文字」というのは多分、ローマ字アルファベットだと思うんですけども、「灰に書く」これはその人の生まれ育ちの中で印象的なものっていうことになると思うんですが、どちらかと言うと二つあると思うんです。一つは囲炉裏、もう一つは火鉢ですね。この灰に西洋文字を書く。僕は個人的には囲炉裏じゃないかなと思っているんですが、あれは火鉢だろうという先生もいまして、これはその人のものに対する印象の濃さによって、俳句って言うのは受け止め方が変わってくるんだなあというのをつくづく経験させてもらったことがあります。

灰に書く西洋文字や楯あかり

これは上伊那の飯島町役場の南前に文化館があります。文化館の西側にこういう写真の句碑が立っております。上伊那ではこういう句碑が60いくつ、70近く立っています。下伊那には一基もないので、何とか下伊那にも欲しいなと個人的には、特に平成28年度にお話しいただいた本島さんのお宅とか、真筆、井月が実際に書いた俳句が高森町にはたくさん残っています。そういったものを句碑にして実際に見てもらおうというのはいいんじゃないかなとそんな風に思います。

もう一つ、この時代背景の中には、

紐を解く大日本史や明の春

というのがありまして、大日本史というのは水戸光圀、水戸黄門さんが手がけた歴史書ですね。これも井月は読んでいて、影響を受けているわけですね。そういったものがあって、ここに関係するものでは、1864年11月、元治元年ですね、水戸浪士一行がここを通過した、という時期がありました。この時は年号からいくと、井月が放浪している年号なのですが、実は井月はこの時にはここにいないんです。半年間、善光寺とか今でいう信州新町から中条村、今は長野市になっていますけど、あの辺をうろついているんですね。

ましてあそこまで行けば越後に帰ればよいのと思うんだけど、越後へは行ってないんですよ。多分ね、これは私の見解、私論ですけども、戦いが、人と争うことが井月は苦手で嫌いだったんです。井月が上伊那で懇意にしていたお酒屋さんに、私が生まれた宮田村なんですが、正木屋酒店というのが今でもあります。そこは山浦山圃という絵描きで俳句も作り、酒屋でありながら跡取りに近い教養人が一人おりました。彼は、郷土史に詳しい方は知っていらっしゃると思いますが、水戸浪士の先導役というかまとめる役に たけだ こうんさい 武田耕雲斎 という人がいるんですが、正木屋には武田耕雲斎とのやり取りの書簡が今も、残っているんです。

つまり、和田峠で戦いをして、伊那谷を通過するよっていう情報が山浦山圃の所へは来ていたはずなんですよ。それを多分、井月は聞いて、これは巻き込まれたらかなわんなあって言って、北へ行った。これは私の私論です。分からんけど多分、そうなんです。

何でかって言ったら、先ほど言いました戊辰戦争で長岡は焼野原にされてしまうんです。新政府軍によって。その時に井月は長岡藩の下級武士と言われています。下級武士であっても、戦いに参加するのが当時の、あたり前の習わしですね。どこにおっても参戦しなければいけない。でも井月は戦争に参加

しなかったんです。つまりそこで自分が一緒に学んだ崇徳館の若い武士たちはみんな戦死していったんです。自分は参加せずに、まあある意味、逃避の方を選んでいったという後ろめたさがあるんですよね。その後ろめたさをずっとひきずっているから、お母さんが亡くなった時には墓参りに行ったという記録もあるんですけども、長居はしてません。すぐに伊那谷に戻ってきてしまう、あるいは北信の方を歩いているわけです。つまり、そういう後ろめたさもあるんだけど、戦争に参加する争いごとの嫌いな人、そういう心情が見えてくるなという気がするんですね。井月はそういう自分の過去を隠しながら、伊那谷を黙秘したまま放浪の生活をしたというそういうところが、故郷を捨てた一つの原因だったと思われるわけです。

5 井月は高森町にもやってきた

今日のテーマの、井月が下伊那にやってきた！ これは上伊那を歩いている時も、上伊那・下伊那の郡境・中川村、あるいは飯島の七久保にもしょっちゅう来ているわけですね。

そして四徳、三六災害で全村移住してしましまして今では村はなくなりましたが、四徳がもつとも頻りに訪れている、泊めてもらう家が多かった地域なんです。ですから下伊那に近いわけですから。

四徳から中川村のみなかた南向の大草に出て、大草から渡場の渡しをわたって、七久保に入って、上片桐を経て、山吹に入る。そういうルートを通るわけですね。明らかにそういうルートが見えてくるわけです。そして山吹に祭魚という俳人がいます。それを通り過ぎて行って吉田に月舟とか千鳥庵あるいは千鳥家という井月の定宿があります。定宿というか、よく寄った所ですね。定宿というところになると、市田の松源寺というお寺があります。みなさんご承知ですね。松源寺へ来て、栽松という当時の和尚がいます。その栽松和尚を頼って、現高森町の山吹村、市田村に入っていきます。そしてその関係からいくと、今度は下市田の中村さんと言うお宅、中村花月宅に寄る。今日は後ろに資料館のみなさんが展示をしてくれています。寄託していただいた井月の真筆がそこにあります。あとでご覧いただければと思いますけれども、そういう俳句、真筆、遺墨を残したことが、井月が伊那に入ってきたという証になっているわけですね。

この井月全集の中に日記があります。山頭火と違って、ほとんど文は書いてないんですけども、メモ的なものを集めたものが載っております。その日記の中にあるのが現在の高森町、そして座光寺の湯澤佳春、そして上飯田の阿弥陀寺、ちょっと戻って松川町に緑葉庵という俳句をやった方、その4軒が日記の中にしっかりと、明治17年から18年、晩年です。晩年こちらへ来た時の日記に、書かれておるわけです。これは完全な、下伊那へ来たという証がそこに残っています。

6 下伊那に来た井月

そして、「俳諧三部集」というのが実はあるんですけども、それは「越後獅子」というのが最初に出ました。そして「家づと集」というのができます。そして20年も経って「余波なごりの水くき」というのが出るんですね。明治18年ですから、ここへ来た時には「余波の水くき」に載せるための俳句収集だったと考えられるんですけど、晩年でその編纂に関わるのはしんどくなっていたと思うんです。ですからそれを起こしたのはろくは六波羅あしう霞松というやはり越後から来て上伊那に住んだ人で、井月の書ではな

いですね。ですから時代を追って井月の体力が弱くなっていくのも、そこから見えてくるわけです。

今、画面にあるのが中村さんのお宅の屏風。後ろに屏風の本物があります。屏風の中で花月亭の一番の傑作だと思われるのは、

夏菊や陶淵明が朝機嫌

という、井月の教養の深さが溢れ出ている句だということですね。陶淵明^{とうえんめい}というのは中国の詩人ですね。

陶潜とも言います。中国の詩人を詠んだ句ということになりますけれども、一枚の色紙の中に七つほどの句が書かれています、こういうものが現実に残っているわけですね。

今、言いかけた「俳諧三部集」の中で「余波の水くき」の編纂の俳諧を明治18年に集めにきたんではないかということなんですけれども、「余波の水くき」には下伊那の俳人は8人しか載っていません。その前の「越後獅子」とか「家づと集」には15人前後の俳人が載っているんですけれども、半分以下になっていく。要するに下伊那との交流は、井月はだんだん遠ざかって行くということになるわけです。お手元のレジュメの中に、いくつか句が書いてありますので、味わっていただければと思います。

私も俳句の専門家ではないので、批評とか俳句から受ける印象はこうですよ、季語はこれで、これがこうですよという話は避けた方がよいのではないかと思いますので、みなさんご自分で読んで、それぞれの人生観で味わっていただければいいんじゃないかなとは思っております。

そういう中でですね、日記の中にあるのは阿弥陀寺までありますよ、という話をしました。

そうすると今度は一番上に高森町って書いてありますよね。地図が一緒にあると思いますので、それを利用して、帰ってからみていただいてもよいですが、新田、山吹、市田、座光寺、飯田、飯田は阿弥陀寺、ここまでが日記にある場所ですね。

そして今度は飯田からですね、鼎、駄科、桐林、川路、今、駅名で残っているので非常に助かるんですがね。足跡を探して歩くのにね。駅名に駄科、時又がありますね。そしてその間の桐林、川路という地籍があります。ここからそれぞれの俳諧集に載った俳人たちが何名かずつ載っております。そして時又の渡し船で天竜川を渡ります。渡ると龍江、下伊那の方はお分かりだと思いますが龍江にわたるんです。渡って行きますと渡という信号があります。その脇で吉沢健さんの家を聞いて、訪ねたんです。この方は郷土史やいろいろで名の知れた方だと思いますが、「うちはねえ、渡しを渡ってすぐの所で酒屋をやっていたんだ」という話とか、「うちも俳句の短冊が結構あるよ」と言って出して見せてくれたんです。そうしたら、梅好と井月の、梅好っていうのは阿弥陀寺の和尚さんですが、その梅好と井月の短冊が出て来たんです。出て来たっていう言い方は、吉沢さんは、井月があるってことを知らなかった。私が行って一緒に見て、「あら、井月がありますね」って言って、レジュメの龍江のところに書いてある俳句が出てきました。

ただ、この

隙な日のさしあふ花の盛りかな

というのは、新句ではありません。上伊那ですで見つかった俳句ですが、こういうふうに井月の書が残っているということで感激しましたね。

このように時又から渡っていくと、泰阜村の唐笠っていう駅名がありますが、その地区に牧島さん、俳号悟芳のお宅があります。そこも俳諧集に残っているお宅でした。万場っていうのは、みなさん行ったことがあると思いますが桜基公園というのが残っています。泰阜村にね。そこに句碑が立っております。

すけれども、これは万場の俳句の元締め的な方の句碑。玉峰^{ぎよくほう}という俳人なのですが、泰阜ではトップの俳人だったんですが、「いと女」という、その奥さんの俳句が井月俳諧集に載っています。玉峰は載ってないんですね。これは玉峰の俳句が良いか悪いかという話ではなくて、多分、奥さんの俳句しか手に入らなかったんだろうな、玉峰はどう判断したのか、提供しなかったんでしょうね。提供していれば玉峰のも載っていると思うんですけれどね。

まあ、そういう万場を出て、門島ですね。門島は今、泰阜ダムでもってまったく様変わりしてますから、この当時の風景ではありませんけれども、門島旅館という旅館があります。その旅館の、姓が万場さんという方がいらっしゃって、その俳句をやった方なんです。

門島から天竜川を渡ると、阿南町の富草、大島地区、ダムの建設で栄えた集落として大島という集落ですが、典型的な様変わりした場所です。この大島地区にも3人ほど俳人の方がいらっしゃいます。大島地区から普通は牛瓜川っていうのかな、下条から流れてくる川に沿って下条へ行く道があるんですけれども、これをちょっと山手に外れると、私も聞きに聞いてやっとたどり着いた恩沢という6軒だけおうちがある集落があります。その恩沢さんというお宅が井月の三部作の中に入っている、俳人のいらっしゃった家なんです。

恩沢から下条を抜けて、下条峠、阿南の富草では泰阜との東の境みたいな所です。仁王関という所に出ていくんですが、仁王関から下条の新井という地籍に出て、ここにもそれぞれ俳人の方があって、地図にある各地名の所には井月編纂俳諧集に載った俳人たちが存在している場所です。ですからそれから見ると、下伊那の南に井月が行った可能性がある所は、阿南町の富草までということになります。

富草から南へは足跡を辿る資料はまったくありませんので、下伊那を歩いたという証はないわけです。真筆が残っているのは、松川町と高森町と座光寺、龍江ですね。真筆が残ってないと、井月が本当に来たかどうかという結論は出せないんですけれども、その俳諧集に載っている俳人たちを辿ると、この地籍の範囲が出てくる。それがこの下伊那と井月との関わりか、一番、資料として着目していくものになるわけですね。

今、地図を見ながらお話させていただきました。写真のこれは双子塚古墳というのが駄科、桐林の先にある、そこから見た川路方面と、間を天竜川が流れておりますが、その地理的な関係を見ていただければと思いますが、ここで天竜川を渡って龍江に行きまして泰阜に行くと、ちょうどこの部分に古墳がありますね。この古墳の頭に玉峰の句があるんですけれども、泰阜「いと女」がいて、泰阜へも井月は行った可能性があるわけですね。

これは唐笠の牧島さんというお宅ですね。俯瞰した写真です。そしてここから天竜川を渡ると、6軒の集落がある恩沢という地籍に入ります。山つきの静かな場所でございます。そして恩沢を通り過ぎて、これが下条峠になりますね。ここはまだ桑の根っこが残って、桑の畑があったのが今でも分かります。ですから今は耕作もしない荒地になっていますけれども、逆に非常に風情のある、ハイキングにはもってこいの場所だなと思って見ていました。

そこを通り過ぎると、仁王関という下条へ抜けていく道になります。そして下条から今、トンネルが開きました。阿智村栗谷へ出ます。これが栗谷の地籍ですね。そしてその先五和には宗圓寺というお寺があります。これも井月と交流のあった寺で、当時の和尚は飯田へ行って庵を作っておりますので、井月との関わりも非常に深いものがありました。次は井月が非常に崇拝しておりました芭蕉の「幻住庵記」

の真筆です。文を暗記していて、ふすま等に書いてあるんです。他に俳文もあります。それをこうやって大切に、こういうのが上伊那には残っているわけですね。これは15ほどあります。写真はつい最近、2年ほど前に公表された「幻住庵記」、4枚の襖になっています。

そしてこの井月句碑が、明治19年12月に行き倒れした駒ヶ根市と伊那市の間、火山峠^{ひやまとうげ}という峠にあります。これは通称、「芭蕉の松」と言われていますが、「芭蕉の松」の下に芭蕉の句碑があります。この芭蕉の句碑の奥に小さく写ってはいるんですけども、井月の句碑が並んで立てられています。芭蕉の、

まつたけや知らぬ木の葉のへばりつき
という句碑があります。

そして井月の句。自筆の辞世の句といわれています

暗き世も花の明りや西の旅

西の旅というのは浄土へ旅立つこと、(太陽の沈む)西に浄土はあるということで、これが辞世の句です。そして、よくいろいろなところに出てくる生涯最後の俳句は、

何處やらに雀の聲きく霞かな

という句です。これは絶筆です。実際に井月が自分で書いてはいるんですが、この句は先ほど言った四徳で若いころに作った俳句なんですね。ですからこのように絶筆と辞世の句とは重複していないということになります。

墓地の周りの木の伐採で、こういう写真が撮れるようになったんですが、塩原家の墓の一つに、俗名・塩原清助(入籍した井月)の刻まれた墓石もあります。広い墓地を撮るために、井月墓石の裏側から撮っておりますけれども、もともと花崗岩ですからどんどん摩耗してしまうので、今では読めませんが、墓には

降とまで人には見せて花曇

という俳句が刻まれていたそうです。作った場所がはっきりしたこの句を選んだと思うのですが、これは駒ヶ根市にある光前寺ですね。光前寺で作った井月の俳句をこの墓に刻んだ、ということになりますね。

さて、ちょっと駆け足でおしゃべりさせていただきましたけれども、まだまだ言い足りない部分もあるんですが、終りの時間も近くなりました。井月がよく訪れた、写真の松岡城址にある井月と交流のあった裁松和尚の松源寺の話をしますと、この前、三浦春馬が亡くなった訃報が伝えられましたが、NHK大河ドラマで、井伊直虎の許婚役、直親を演じた俳優ですね。直親の幼名亀の丞が500年前にこちらに匿われて、十数年ここにいて、二十歳になって帰って行ったということなのですが、笛を非常に得意として吹いていたということで、亀之丞の笛を吹いた絵が寺に寄贈されていますが、これは井伊家のあった今は浜松市ですが引佐町渋川の伊藤さんという絵描きの方から提供していただいた絵ですね。松源寺や資料館等に保管されています。

井月の

朝涼や割前髪わりまえかみの笛の役

という俳句があります。割前髪わりまえかみというのは、成人式、元服するまではこういう頭です。今日はそこに絵を飾ってもらっていますが、「割前髪わりまえかみの笛の役」という、まさに亀之丞を詠った俳句が現存してお

ります。

そういうことで先ほどの、上伊那には60数基の句碑があり、長岡には8基くらいの句碑が立つと話しましたが、ぜひとも下伊那にも井月の句碑があると良い、要するにこういった文学碑というのがあると、そこからイメージの発想ができるということですね。風景がきれいだなど、ただ歩いているのも一つですけれども、文学碑との出会いによって、その場所のイメージの広がりのきっかけになるということですね。

ですからそういう文学碑というの、一つの文化を伝えていく、その時代の文化の置手紙的なものですかね。そういうふうに思うわけです。コロナ禍の中ですが、地域文化の灯が衰退しないように、みなさんがいろんな所に興味を持って、漂泊とまでは云いませんが、自由に旅はできないまでも、文化への意識を保って、旅の目で町の魅力を探し、再確認しながら、この「時の駅講座」に参加することによって、知識・教養を身に着けていただくことを願って、お話を終わらせてもらいます。

何か質問等ございましたら、まだ言い足りないことがいっぱいあるので、答えられればと思います。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

